研究報告

質的研究法を用いた高齢学習者のライフストーリー分析
―人生の出来事とその意味づけの変容に着目して―

一般社団法人　ＪＡ共済総合研究所
調査研究部　研究員
杉浦彰子（すぎうら しょうこ）

アブストラクト

本研究の目的は、高齢学習者のライフストーリーに着目し、人生の出来事と学習を始めたきっかけや継続の動機がどのように関連しているのか明らかにすることである。本研究では９名の研究対象者にライフストーリー・インタビューを実施した結果、近親者との死別や人間関係のもつれという転機が、学習を始めたきっかけや学習の継続に関係していることが明らかになった。また、質的研究法を用いることで、高齢者自身による人生の振り返りに着目し、学習のきっかけや継続の動機は「生きがいづくり」などの大まかな理由にとどまらないことを明らかにした。さらに、高齢学習者のライフストーリーに耳を傾けることはエイジズム緩和に寄与することを示し、高齢者福祉事業等に従事する者にとっても意義深いことを示唆した。

（キーワード）　生涯学習　高齢者　ライフストーリー　人生の出来事　意味づけの変容　質的研究

目　次

1．はじめに
2．先行研究と問題提起
3．研究の目的と質的研究法を用いる意義
4．研究方法
5．研究結果・考察①―ライフストーリーの語りからみる学習のきっかけや継続動機―
6．研究結果・考察②―人生の出来事とその意味づけの変容―
7．研究結果・考察③―ライフストーリーの聞き手である、筆者の自己エスノグラフィー―
8．結論
9．まとめにかえて―ライフストーリー研究の社会実装の可能性―

1．はじめに

文部科学省（2006）によれば、「「生涯学習」は一般に、人々が生涯に行うあらゆる学習、すなわち、学校教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など様々な場や機会において行う学習の意味で用いられている。また、生涯学習社会を目指そうという考え方・理念自体を表していることもある。」と定義されている。また、文部科学省（2016）によると生涯学習社会の実現において次のように述べている。

> 教育基本法の精神にのっとり、国民一人一人が自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現を目指して、生涯学習の振興に取り組んでいます。（平成28年度文部科学白書「第３章 生涯学習社会の実現」より）

この白書どおり、生涯学習が学習者一人一人の人格を磨くことや、豊かな人生を送ることに寄与しているのであれば、高齢学習者は長い人生の中で、いつ、どのようなタイミングで「学びたい」と思い、行動に移しているのか。そして学ぶことは、人生にどのように意味づけられているのだろうか。

本研究を始めた当初、筆者は生涯学習センターに勤務して３年目の職員であった。働き始めた頃は、生涯学習センターの利用者に高齢者がとても多いことに驚いた。そして、高齢者が経済や歴史、科学などの趣味・娯楽と言うには専門性が高い講座を真剣に受講している姿は、大学を卒業したての筆者にとって不思議に映った。長年の会社勤めと子育てを終え、これからの余暇を悠々自適に過ごすことができるであろう高齢者の「学ぶ理由」が想像できなかったからだ。働き始めた頃こそ、学ぶ高齢者を不思議な存在として捉えていた筆者だったが、熱心に学ぶ高齢学習者と関わるうちに１つの疑問を抱くようになった。生涯学習センターに長年通っている高齢者は、どのような人生を送り、なぜ学びを必要としているのだろうか。

本研究は、このような筆者の疑問から出発した。そして、高齢学習者が学び続ける理由は、単に知識の向上や生きがいづくりにはとどまらないと感じ、学習者個々のライフストーリーに着目することで新しい知見が得られると予想した。

本稿は、2020年度に提出された修士論文を再編したものであり、研究当時は生涯学習センターに勤務しながら大学院に通い執筆した。その頃は、書籍「LIFE SHIFT（リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット（池村千秋，訳），2016）」や「人づくり革命基本構想（人生100年時代構想会議，2018）」などにより「人生100年時代」という言葉を耳にするようになった時期である。加えて、この時期は新型コロナウイルスが発生し、社会経済活動が制限された時期とも重なる。

本稿の構成は次のとおりである。第２節では生涯学習や高齢者に関する先行研究について触れ、問題提起を行う。第３節で本研究の目的と質的研究法を用いる意義について述

べ、第４節では本研究で用いた手法と研究手順を示す。第５、６節で高齢学習者のライフストーリーを分析した結果を考察し、第７節では筆者自身が本研究の過程で高齢学習者の捉え方をどのように変容させていったのかについても触れる。そして、第８節で、結論を記し、第９節では本稿のまとめにかえて、ライフストーリー研究の社会実装の可能性について述べることとする。

２．先行研究と問題提起

文部科学省（2018）は、「人生100年時代」「超スマート社会（Society5.0）」に向けて社会が大きな転換点を迎える中にあり、生涯学習の重要性は一層高まっていることを指摘している。

内閣府（2020）によると、60歳以上の者のうち、この１年くらいの間に何らかの「学習」をしたことのある人は、60代では55.0％、70歳以上では42.5％となっている。学習の形式は、60代では「インターネット」が最も多く16.5％である。一方、70歳以上では「公民館や生涯学習センターなど公的な機関における講座や教室」が16.2％と最も多くなっている。さらに、60～69歳で81.4％、70歳以上で62.6％の人が「学習したい」と回答している。このことから、高齢者の学びに対する関心が高いことがわかる。

生涯学習に関する先行研究は、時々の政策動向や教育実践との結びつきが強く、それが研究にも反映される傾向が強くみられること（手打，2005）や、2000年以降は、特に社会構造とその変化という視点から生涯学習社会のあり方に焦点を合わせた総論的論考が特に多く見られること（久井，2011）が指摘されている。つまり、生涯学習の研究において「学習者個人の学び」よりも生涯学習社会の実現という「社会の要請」の視点からみた先行研究が多いことが言える。しかし、生涯学習分野が果たす役割という「社会の要請」に主眼を置いた研究では、個人を集団のなかの一部と捉えてしまい、学習者個人の生涯学習の経験という視点に十分な関心が寄せられていない。生涯学習社会の実現を意識するあまり、学習者の学習の成果の活用（未来）に目を向けがちになり、学習者たちが今まで歩んできた人生（過去）は等閑視されてきたといっても過言ではない。

高齢者に関する研究動向を見てみると、人間の発達研究はここ100年のうちに進展し、1970年頃から提唱された生涯発達理論は、老いを生きる人々も発達し続ける存在として捉える方向性への変革をもたらしたことが示されている（原・沼本，2004）。内閣府（2018）によれば、2018年２月16日の高齢社会対策会議（第29回）における案の決定を経て、４度目となる高齢社会対策大綱（以下、新大綱）が閣議決定された。新大綱では「65歳以上を一律に『高齢者』と見る一般的な傾向は、現状に照らせばもはや、現実的なものでなくなりつつある」ことを指摘している。

一方、人々の高齢者に対するイメージには、高齢者に対する偏見・差別である「エイジズム」が存在する（権藤（編），2008）。内閣府（2004）「平成15年度 年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査結果」では、全国の男女20歳代528人、30歳代663人、40歳代633人、50歳代668人、60歳以上の男女1,449

人の計3,941人を対象とした調査を実施した。この意識調査をみてみると「『高齢者』『お年寄り』に、どのようなイメージを持っているか」について「心身がおとろえ、健康面での不安が大きい」と思う人が72.3％と７割を超え最も高い。「高齢者に対する差別や偏見はあると思うか」については、「大いにあると思う」が5.9％、「多少あると思う」が51.2％となっており、両方を合わせた『あると思う』は57.0％と過半数を超えている。高齢者に関する先行研究では「老いを生きる人々も発達し続ける存在」と捉えられながらも、人々の高齢者に対する意識には、エイジズムが存在している。

堀（2015）は、高齢者の学びの特徴について、「対処的ニーズ（高齢者が自律的生活を行ううえで根幹となるニーズで読書算・健康・経済・法律・居住環境などの学習を含む）」と「超越的ニーズ（人生の有限性を乗り越える）」という、かたや生活との格闘、かたや生活の超越というパラドクシカルな志向性に彩られていることを示した。堀(2015)は、高齢者の学習支援において、高齢者の多様性を理解する必要があり、彼らの学習歴と人生史を絡めつつ理解することの重要性を述べた。しかし、松本（2016）によれば、社会教育・成人教育研究においてライフストーリーそれ自体から学習を分析する研究はまだ少ない。

３．研究の目的と質的研究法を用いる意義

本研究の目的は、生涯学習センターに長年通う学習者のライフストーリーに着目し人生のライフイベントを含めたさまざまな出来事と学習を始めるきっかけや継続動機がどのように関連しているのか、そして、語ることは、人生の出来事の意味づけをどのように変えているのかを明らかにすることである。

また、本研究の特徴は、質的研究の方法論であるライフストーリー法を用いる点である。質的研究は、量的な研究と対比される。現象を数えられる量に還元し、それを統計的に処理して、因果的な関係への推論を行う量的研究に対して、現象の詳細を主に言語的に記述し、そこでの直感を含めた検討を行うことにより、現象を解明するのが質的研究である（能智ら，2018）。

ライフストーリー研究は、心理学をはじめ、文化人類学、社会学、教育学、看護学などさまざまな学問の研究に用いられている。ライフストーリー研究は、日常生活で人びとがライフ（人生、生活、生）を生きていく過程、その経験プロセスを物語る行為と、語られた物語についての研究（やまだ，2000）である。人生という長い時間軸のなかで人が自分自身の経験をどのように組織するか、どのように意味づけるか（やまだ，2000）とあるように、学習者ひとりひとりのライフストーリーを聞き取り、個々の人生において、生涯学習がどのように語られるのかに注目した。ライフストーリー研究を用いることで「暗黙のうちに組み込まれてきた文化の物語の見直し」（やまだ（編），2000）をしていく。高齢者が多様なライフスタイルを送り、高齢者を一括りでは語れなくなった現代にとって高齢学習者の多様性を理解するためにライフストーリー研究は有効である。高齢学習者のラ

イフストーリーを明らかにすることで、生涯学習センターで見せる学習者の顔だけでなく、学習者の人生を意識し、総合的に高齢学習者を捉えることができると考える。

以上の理由から、本研究では、高齢学習者のライフストーリーを研究することに重点を置くこととした。

4．研究方法

（1）調査期間

本研究の調査期間は2018年11月～2020年9月である。

（2）研究フィールドの紹介

フィールドは、執筆当時筆者が勤務していたA生涯学習センター（仮称）である。ライフストーリーは、語り手（研究対象者）と聞き手（研究者）の共同行為から生まれる（やまだ，2021）ため、聞き手である筆者の勤務先をフィールドにすることで、学習者の学びに関するエピソードを共有しやすく、より語りが豊かになると考えた。

A生涯学習センター（以下、生涯学習センター）は、関東北部に位置し、生涯学習に関する情報、学習機会及び学習の場の提供等を行い、県民の生涯にわたる学習活動の推進に資することを目的として1990年代に開所した。2019年度の施設利用者は延べ約250,000人である。

（3）研究対象者の選定

本研究は、生涯学習センターに3年以上通う60代～90代の9名の高齢学習者を対象として、全13回（合計11時間16分）の半構造化インタビューを実施した。なお、対象者はAさん～Iさん（仮名）とする。

学習者が生涯学習センターを利用する目的は主に3つに分けることができる。

① 講座の受講
② サークル活動への参加
③ ボランティア活動への参加

表1に、研究対象者の主な生涯学習センター利用目的と利用年数、インタビュー実施日と時間を示した。なお、利用年数は学習者の発言をもとに大まかな年数（※）を記載している。

（4）研究手法と手順

本研究は、ライフストーリー法を用いて、高齢学習者が語ったライフストーリーの分析とライフストーリーの聞き手である筆者の自己エスノグラフィーについて分析を行った。やまだ（2008）は「老年期にライフストーリーを語る意味」として、あるがん患者の人生物語を用いながら、その意味を3つにまとめている（**表2**）。

ライフストーリーは以下の手順に沿って聞き取り、分析した。

① 手順1：フィールドエントリー（信頼関係の構築）

質的研究では、対象者とのラポールの形成（信頼関係の構築）に大きな注意が払われ（能智ら，2018）、重要視されている。そこで、インタビュー調査を始める前に学習者の参与観察を行った。具体的には以下の通りである。

はじめに、仕事をとおして高齢の学習者と関わりながら、学習者個々人の学習センター

（表1）対象者の生涯学習センター利用目的とインタビュー実施日一覧

研究対象者	利用目的（年数）※	インタビュー実施日【時間】
Aさん（60代女性）	ボランティア活動（20年以上）	2018.11.29　【46分】
Bさん（70代女性）	ボランティア活動（3年） 講座受講（10年未満）	2018.11.29　【30分】 2019.07.21　【46分】 2020.03.07　【54分】
Cさん（80代男性）	講座受講（20年以上）	2019.07.26　【46分】
Dさん（70代女性）	ボランティア活動（5年） 講座受講（10年未満）	2019.08.06　【45分】
Eさん（60代女性）	講座受講（4年） サークルの講師（3年）	2019.10.24　【50分】 2020.06.17　【66分】 2020.09.27　【105分】
Fさん（70代男性）	絵画サークルメンバー（10年程度）	2020.07.04　【40分】
Gさん（60代女性）	マナーの講師 （ボランティア以前2年程度） ボランティア活動（10年程度）	2020.07.17　【50分】
Hさん（90代女性）	ボランティア活動（20年以上）	2020.07.28　【38分】
Iさん（60代男性）	講座受講歴（5年程度） 絵の講師（2年程度）	2020.08.26　【60分】

（出所）筆者作成

（表2）老年期にライフストーリーを語る意味

＜①人生回顧（ライフレビュー）＞

ライフレビューとは、過去を振り返って人生を統合することである。

①－1　老年期には自分の人生を、自分が生きてきた人間関係や時代や歴史のなかで、意味あるものとして認めたいという欲求が高まる。

①－2　回想法によって高齢者の人生回顧を聞くことは、過去の人生をまとまりのあるものとして意味づけ、記憶力を高め、人を生き生きとさせるのに役立つ。

＜②人生物語の生成と語り直しプロセス＞

②－1　物語は、繰り返し「語り直し」されることによって、テーマや語り方が変化し、過去の未解決の葛藤や喪失や悲嘆経験の意味が再構成される。

②－2　過去にどのような出来事があったかという事実よりも、語り直しプロセス自体が、生きる力を生み出し、人生の意味をポジティヴに変える力をもつ。

＜③研究者と対象者の共同行為としてのライフストーリー＞

③－1　インタビュー場面や作品を見せる場そのものが、生き生きとしたコミュニケーション場面となり、語り手と聞き手がともに物語をつくりあげていく作業となる。

③－2　話し手の老人は自分の経験を尊重して聞いてもらえると、自尊感情が高められる。

③－3　聞き手は、人生の先輩である老人から学ぶことができる。

（出所）やまだ（2008）を元に筆者作成

での様子を参与観察した。具体的には、講座受講生であれば、一緒に講座を受講し、講座が始まる前や休憩時間、講座終了後などに自ら受講生に話しかけ、雑談をするようにした。まずは日常的な世間話から始め、何度か繰り返したのちに、互いの家族の話や筆者自身の個人的な話をするなどして、少しずつ距離を縮めてラポールを築いた。その際、学習者とは仕事上の付き合いとして関わり始め、徐々に個人的な関係性を築けるよう雑談の話題や時間を増やすなど留意していた。

その他、サークル活動やボランティア活動にも参加してフィールドに溶け込みながらしばらく参与観察をしたのち、複数人に個別のインタビューを依頼した。インタビュー後も対象者の生涯学習センターでの様子について、参与観察を行った。

② 手順２：ライフストーリー・インタビューの実施と分析

参与観察によりラポールを築くことのできた９名を対象に、半構造化インタビューを実施した。はじめに「生涯学習を始めようと思ったきっかけ」について質問した。この問は、学習者が生涯学習を始めた頃を振り返るきっかけの質問であり、語られる内容からヒントを得ながら徐々にごく自然なかたちで生涯学習以外の人生にまつわるさまざまな情報や出来事（家族構成、子どもの頃のエピソード、人生の印象的な出来事等）に会話を展開することに努め、ライフに触れていった。インタビューの最後には、「自身の人生を振り返った上で、生涯学習をどのように捉えているか」を聞き、学習者が生涯学習に取り組むことをどのように意味づけているかを探った。以上のように２つの共通質問を大枠とした。インタビュー内容は対象者の了承を得たうえで録音し、その語りを分析した。

③ 手順３：人生の出来事とその意味づけの変容の分析

ライフストーリー・インタビューでは、学習者の多くの語りを聞くことができたものの、人生の出来事が学習とどのように関わり合っているのかは明らかにできなかった。そこで、Ｂさんと、Ｅさんの合計２名に対してビジュアル・ナラティヴを使ってインタビューを行った。

やまだ（2010）によれば、描画イメージを広義の言葉とみなして「ビジュアル・ナラティヴ」と位置付けている。「あなたの人生（過去・現在・未来）を一枚の図（あるいは絵）にしてください。それに説明を加えてください。」というインタラクションによって、ライフストーリーを絵で描いてもらい、その絵を対象者と研究者が両者で見ながら語り合うことを試みた。ビジュアル・ナラティヴを活用した結果、ビジュアルを活用することで語りが豊かになる対象者（Ｅさん）と効果を示さない対象者（Ｂさん）がいるという結果になった。そこで、今回は、語りが豊かになったＥさんのみ、インタビューを継続した。しかし、１回目のインタビュー後、新型コロナウイルスの影響でＥさんは外出を控えており、１回目のインタビュー調査を終えてから２回目のインタビューを行うまで約８か月空いてしまったことに加え、１回目と２回目のインタビュー内容が非常に豊かであったた

め、語られた内容を筆者がきちんと理解できているかの確認作業としてトランスビューを試みた。神崎・サトウ（2014）によればトランスビューとは、調査協力者（研究対象者）と調査者（研究者）との視点（view）の融合（trans）を目指して、インタビュー内容や参与観察データを図にまとめ、その図と共に次のインタビューを行う手続きのことである。トランスビューは互いの異なる見方を融合することで、結果の真正性を担保する方法である。この手続きにより、対象者がどのような人生を歩み、人生の出来事と学習がどのように関連しているのか。そして、語ることは人生の意味づけをどのように変えたのかについて考察した。

④　手順４：ライフストーリーの聞き手である筆者の自己エスノグラフィー分析

最後に、研究者であり、研究当初は働きながら学ぶ生涯学習者でもあり、生涯学習を推進する職員でもあった筆者が、対象者のライフストーリーを聞き取ることをとおして「高齢学習者」の捉え方をどのように変容させていったのかについて研究ノーツをもとに考察した。ライフストーリーは語り手だけでなく聞き手が必要で、語りが調査者と語り手の相互行為の産物であることが理解や解釈に不可欠である（能智ら，2018）。このことから、聞き手である筆者の自己エスノグラフィー分析も行った。伊藤（2015）によると、自己エスノグラフィーはある事象の当事者としての自らの経験を対象化して、自己について再帰的に振り返る。そして、「何を」「なぜ」「どのように」行ったか、感じたかを探ることをとおして自己自身、自己の行為あるいは自己と他者との相互行為、さらにその文化的・社会的な背景等を深く理解しようとすることである。「自己エスノグラフィー」は「物語」としての認識論的課題も有しているが、そこには「非・当事者」には言及しえない「当事者の視点」があり、「事象の解明」あるいはその視点の「実践への応用可能性」において、有益な知見の提供が期待できる。研究手法としての「自己エスノグラフィー」の意義は、「読み手」が「語り手」（「自己エスノグラフィー」の著者）の経験をとおして考え「自らを自省する」ところにある（伊藤，2015）。この点からライフストーリーの聞き手である筆者が、対象者との語り合いの中で「高齢学習者」の捉え方をどのように変容させていったのかについても注目した。

5．研究結果・考察①－ライフストーリーの語りからみる学習のきっかけや継続動機－

本節では、インタビュー事例を示しながら、学習のきっかけや継続動機分析結果について考察する。

（1）近親者との死別や人間関係のもつれを語った学習者

インタビューの最初に学習を始めたきっかけについて質問したが、その後のライフストーリーに耳を傾けるうちに、この問いに対して最初に答えた内容とは別の、もうひとつのきっかけが明らかになった。それは、近親者との死別や人間関係が上手くいかないなどのいわゆる「人生の悲しい経験」という転機で

Aさんの語り

筆：生涯学習をこの頃（生涯学習センターの開所当時）から知っていましたか。
A：その頃はないよね。ひとつのただのネーミングで。
着付けやってたから。・・・着付けやる前に、妹と父を亡くして気持ちが落ち込んでて、何か、資格取んなきゃと思って、○○インストラクターの資格とってんの。
（中略）
筆：それは、生涯学習センターでボランティア活動を始める前？
A：そう、（中略）父と妹を亡くしてるから。なんか乗り越えてきちゃってるのよ。
資格を取ったからこう（センターでボランティア）じゃなくて、とにかく気を紛らわせるのに、気持ち落ち込んでたから、これいいな、使えるなって。
わざわざお金払ってね、資格を取ったのよ。
（資格を取れば）あちこちの教育委員会に紹介しますよ、って。
（中略）
で、～市の教育委員会はとおいな～と思ってたら、ここ（生涯学習センターのボランティア募集を見つけて）。

ある。

Aさん（60代女性）は生涯学習センターに通い、ボランティアをするようになったきっかけとして、①センター開所に伴うボランティア募集の広報誌を見たこと、②子どものPTA活動の経験、③着付けの講師の経験などを話してくれた。しばらくそれぞれのエピソードについて楽しそうに語っていた。ここまでの語りでAさんは筆者にとって、パワフルなお母さんというような印象だった。

しかし「じゃあ、Aさんは、生涯学習をこの頃（生涯学習センターの開所当時）から知っていましたか。」という筆者の問いかけに対して、上記語りのように、実の父と妹のことを話してくれた。

この語りから、冒頭に述べた①～③も学習を始めたきっかけにはなっているが、「父と妹の死」という「悲しい経験」から「とにかく、気を紛らわせたい。」「前に進みたい」などの心情が、生涯学習へと気を進めたことがわかる。「PTA活動が楽しかった」という経験と、近親者の死で落ち込み「とにかく、気を紛らわせたい」という思いが内包した学習のスタートだった。

その他、５名の分析結果を次のとおりにまとめた（**表３**）。

表３のように以上の６名のインタビューは「生涯学習を始めようと思ったきっかけ」から語りが出発し、人生の様々な出来事を語る中で、近親者との死別や人間関係のもつれという転機が、学習を始めたきっかけや学習の継続に関係していることが明らかになった。

杉浦（2011）によると、転機を語ることは「転機の記述で示された変化は、自分がどのように成長したかについての信念であり、これからもそうあるべきだという価値観の反

（表3）人生の悲しい経験と学習の関連に関する結果

対象者	悲しい経験に関するエピソード	学習との関連
Bさん （70代女性）	孫に喜んでほしくて技術習得のためにもなると思い始めたボランティア活動であったが孫や子どもに喜んでもらえなかった（活動を理解されなかった）	＜学習の継続との関連＞ 親族には理解してもらえなくても、生涯学習センターを利用する子どもたちは喜んでくれる。
Cさん （80代男性）	若くして妻を亡くした	＜学習のきっかけとの関連＞ 子育てに追われながらちょっとした息抜きに美術館へ美術鑑賞に出向くようになった。
Dさん （70代女性）	・人間関係のもつれ ・母や姉の病気に対する恐怖（人生の有限性との葛藤）	＜学習継続との関連＞ 夫の転勤先での人間関係のもつれを語ったものの学習のきっかけとの直接的な関連は結論づけられなかった。しかし、親族の病気で人生の有限性を感じ、葛藤を抱えるもボランティア活動を継続することにより気分を前向きにしていることを語った。
Eさん （60代女性）	・別れた夫との死別 ・自身の病気	＜学習のきっかけとの関連＞ 次節で詳細に分析
Iさん （60代男性）	親からのDV（ドメスティック・バイオレンス）	＜学習のきっかけ・継続との関連＞ 辛い経験をしているから芸術活動を続けられていると語る。

（出所）筆者作成

映」と言える。つまり、悲しい経験を転機と捉え、学習することで、人生を好転、あるいは前に進めようとしたと考えられる。そして今は、生涯学習が充実した日々を送るために必要な活動になっている。こうした経緯が学習の継続につながっている。そして、学習を続けていくうちに、人生を好転させることよりも「楽しさ」「充実感」が勝り、現在まで学びの活動を続けていることが明らかになった。

（2）転居を繰り返していた経験が、生涯学習を始めるきっかけになりうるか

今回の９名の語りのうち、Hさん、Iさん以外の７名に共通していたのは、転居の経験を語っていることだった。

国立社会保障・人口問題研究所（1996）「第４回人口移動調査」では、生涯移動の動向について、これまでに居住したことのある都道府県数が１つのみの人は全体の約４割を占め、３つ以上の都道府県に住んだ経験のある人は全体の３割であったことを示している。今回の対象者が転居を繰り返していたのは、この頃であるが、当時の都道府県別のデータは公表されていなかったため、統計データから、生涯学習センターで学び続ける９名の高齢者のうち、７名が転居を繰り返していたことが偶然なのか、学習を始めるきっかけや学

習継続に関係しているのか、結論付けることはできなかった。

しかし、本研究の対象者のうち、近親者との死別や人間関係のもつれに加え、両親または夫の仕事の都合による転居が多いことは、言い換えれば自分の意思に反して人や土地から「別れ」「離れ」を経験している人が多いという見方もできる。

6．研究結果・考察②－人生の出来事とその意味づけの変容－

この節では、今回の対象者の中で、豊かに、詳細に自身の人生と生涯学習について語ってくれたＥさんのライフストーリーをもとに、人生の出来事と学習がどのように関わり合っているのかをビジュアル（イメージ図等）を用いて分析し考察した。

研究の手順は**表４**のとおりである。

（1）インタビュー１回目前半（イメージ図作成なし）

Ｅさん（60代・女性）に対し、最初のインタビューでは、他の８名と同様に半構造化インタビューを行った。Ｅさんは「講師養成講座受講がきっかけで、チラシを見て、講座に途中参加しました。」と生涯学習センターに通うきっかけを語ってくれた。その頃、東京からＡ県に引っ越してきたタイミングであり、Ｅさんは50代前半で眼瞼下垂というまぶたが下がってしまう病気に悩まされていた時期でもあった。病気になった頃は、ある外国語[1]の発音を習い始めた時期とほぼ重なっており「発音練習がリフトアップに繋がるらしい」ことに偶然気付き、そのことを世間に広めたいと思うようになったと現在までの道のりを語った。

（表4）Eさんライフストーリー研究の手順

		ビジュアル（イメージ図等）
(1)	インタビュー１回目　前半	なし
(2)	インタビュー１回目　後半	図１
(3)	インタビュー２回目	図１
	インタビュー２回目終了後、語りを整理	図２
(4)	１・２回目のインタビュー結果を筆者が可視化	図３
(5)	インタビュー３回目（トランスビューの試み）	図１、３、４ 図３にＥさんと筆者が語りを書き込み図４が作成された。
(6)	３回目のインタビュー中に筆者とＥさんが共同生成した図４を清書し、生涯学習と人生の出来事の関係性を探る。	図５

（出所）筆者作成

1　ある特定の外国語の発音を習い始めたＥさんであるが、本稿では仮名で紹介していることから具体的な言語名は差し控え「ある外国語」または「外国語」と表記する。なお、すべての外国語の発音が眼瞼下垂やリフトアップに効果があると実証されているわけではない。

（2）インタビュー１回目後半（イメージ図あり）

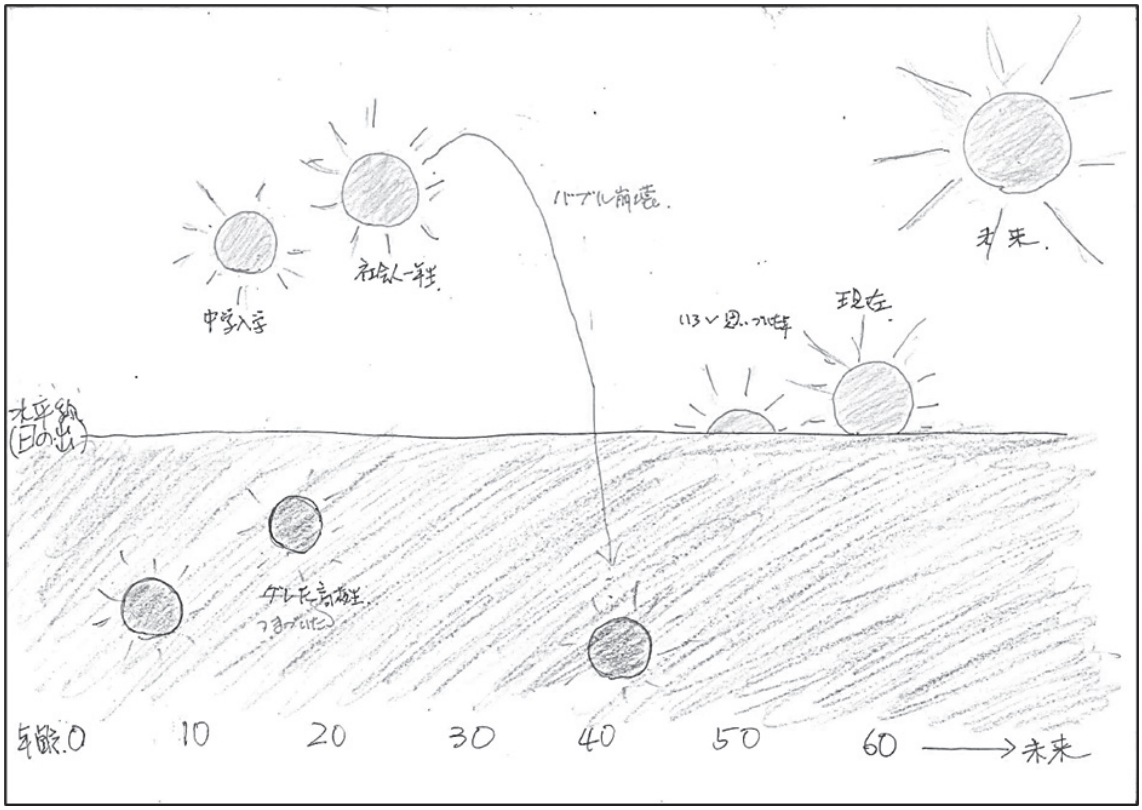
インタビューの途中から、Ｅさんの「過去・現在・未来」に関するイメージ図（**図１**）を20分程度で作成してもらった。最初は、人生をイメージ図にすることに抵抗があったようだが、イメージ図というビジュアルを活用し「ビジュアル・ナラティヴ」の手法に切り替えることで、以下の人生の出来事が新たに語られた。

このように同じイメージ図を見て、ビジュアルを介して語り手と聞き手が語り合うことで、聞き手にとっては新たな視点から質問しやすい状況を作り出すことができた。そし

ビジュアルを活用したインタビューで新たに語られた人生の出来事

①転校を繰り返した小学生時代
②有名私立に入学し、これまで低迷していた人生が華やぎ出した中学生時代
③つまずいた高校生時代
④良い会社に就職できた社会人1年目
⑤結婚、離婚、元夫との死別など「いろいろあって、だいぶ落ち込んだ」30代
⑥「そろそろなんか考えた方がいいよね（仕事の他に）」と思い始めた40代後半
⑦「発音体操を思いつき、始めた」50代

（図１）Eさんが作成した「過去・現在・未来」に関するイメージ図



（出所）Ｅさん作成

て、元夫との死別など「いろいろあって、だいぶ落ち込んだ」という「悲しい経験」をはじめ、子どもの頃の思いや「そろそろなんか考えた方がいいよね（仕事の他に）」と思い始めたことなど、ビジュアルなしでは語られることがなかった語りを引き出すことができた。

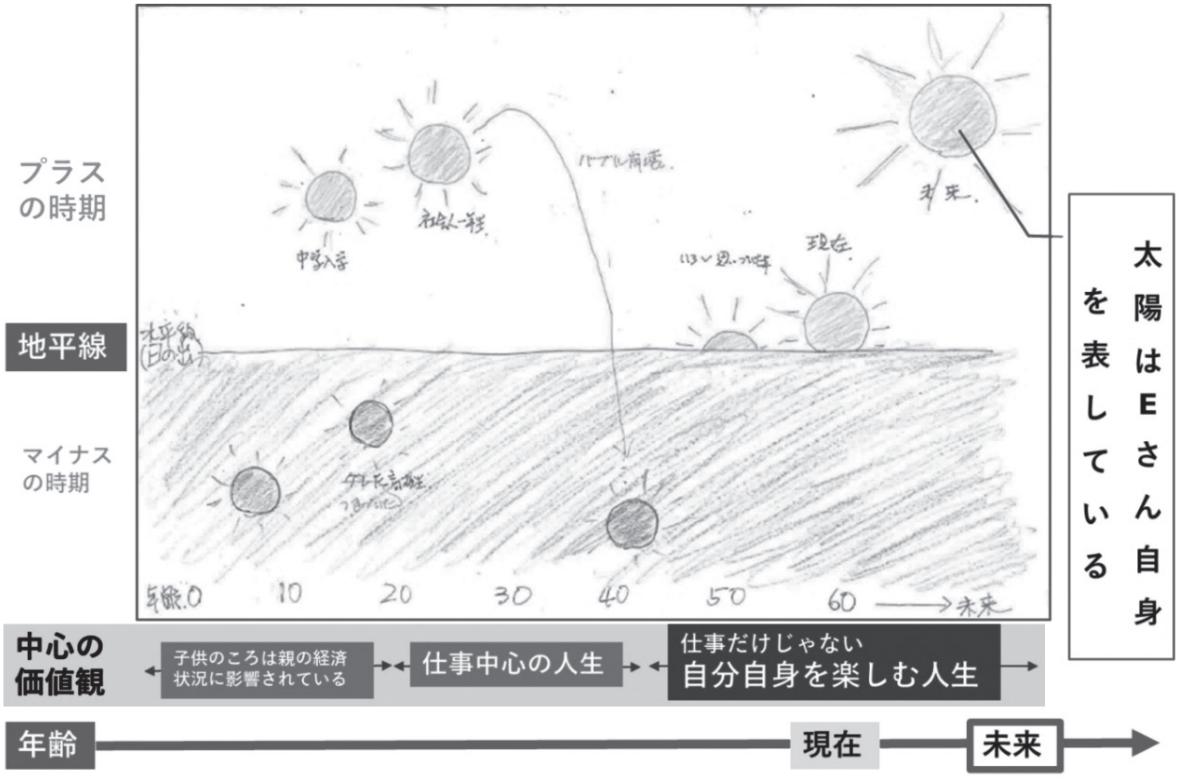
（3）インタビュー２回目（イメージ図あり）

１回目のインタビューのイメージ図（図１）を使って、２回目の語りを聞き取った。すると、**図２**のように親の経済状況に左右される子ども時代、経済活動を成功させることに重きをおいた20代～40代、さらに50代の「Ａ県に引っ越し」「母の介護」などの転機をきっかけに、人に伝えることや学ぶことについて価値を感じるようになっていることがわかった。このことから、年代によって、Ｅさんの中心としている価値観が変容していることも明らかになった。

２回のインタビューをとおして、Ｅさんの人生の出来事をたくさん聞くことができた。時折、Ｅさんは、聞き手である筆者の学習動機にも興味を持ってくれた。筆者が大学院に進学したいと思った経緯を聞いたＥさんは、自身の若い頃と重ね、体力と自分の時間があることは学習環境にとって重要だと考えていることがわかった。その他、現在の翻訳家になった経緯も理解することができた。

たくさんの人生の出来事が語られ、気持ち

（図2）Eさんが作成した「過去・現在・未来」に関するイメージ図に筆者が加筆



（出所）Ｅさん、筆者作成

の浮き沈みがあったことは理解できたが、経済活動に重きを置いていたＥさんが、自身の病気や近親者の病気を機に仕事以外の「学習」に価値の重きを置くようになったのはなぜか、この段階でははっきりとわかっていなかった。

（４）インタビューの途中経過を筆者が可視化

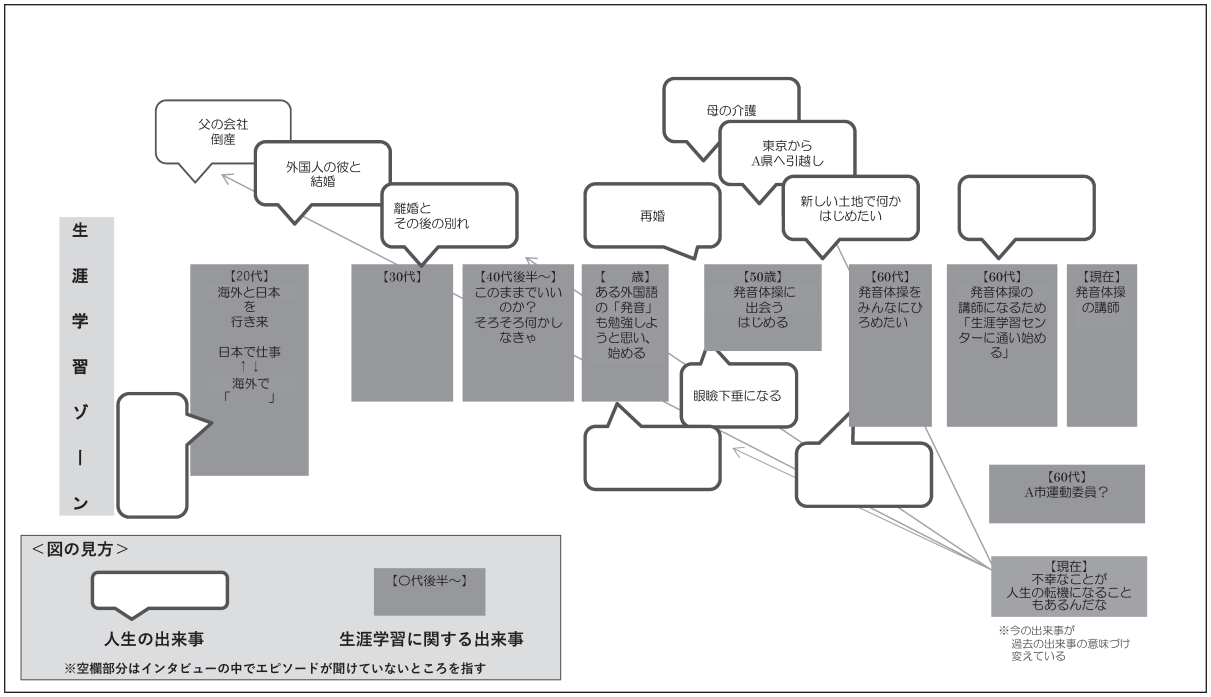
新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、生涯学習センターの講座が中止、一時臨時休館になるなどして、１回目のインタビューと２回目のインタビューの間が約８か月、そこから３回目のインタビューまでは、３か月以上間が空いてしまった。筆者は、生涯学習とＥさんの人生の出来事の関係性を可視化して整理するために「生涯学習と人生の出来事の関係図（**図３**）」を作成した。

図３を作成すると、40代後半「このままでいいのか？何かしなきゃ！」から60代「発音体操を広めたい」に至るまでの経緯を中心により深く聞き取る必要があることに気づき、第３回目のインタビューに向けて、質問したい事項を空白の吹き出しで図３に表し、インタビューに臨んだ。

（５）インタビュー３回目ートランスビューの試みー

Ｅさんが作成していた図１と筆者が作成した図３を見ながらインタビューを進めた。図３をＥさんに示すことで、１、２回目のインタビューを筆者がどのように聞き取ったかを示すことになる。これは、対象者と研究者である筆者の視点を融合させる、トランスビューの試みである。図３をＥさんに示すと「ち

（図3）Eさんの1、2回のインタビューの結果を筆者がまとめた「生涯学習と人生の出来事の関係図」



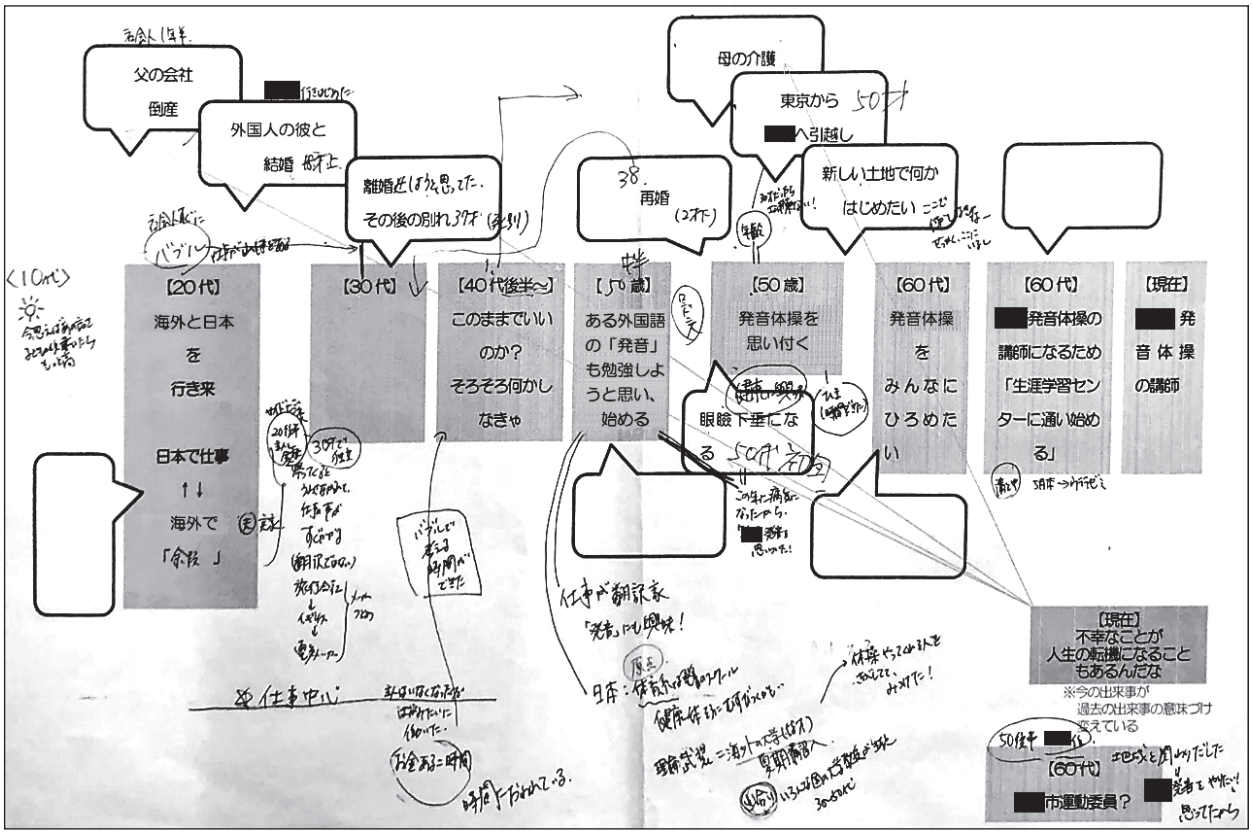
（出所）筆者作成

ょっと待ってね。(老眼鏡をかける)そうそう。よく聞いてたね。あーそうそう。へー。」と言い、図を指で差しながら、語り始めた。

Ｅさんが、図３を見ながら語り始めたので、筆者は図３の中に語りを書き始めた。すると、Ｅさんも時々、自分で書きたいような素振りを見せ、ペンを渡すと時々図に書き込むようになった。当初は筆者が、インタビュー内容を整理するために作った図３が、語り合ううちに図を共同生成する流れになった(**図４**)。

図を共同生成しながら、Ｅさんが図と記憶を照らし合わせ、時に１、２回目のインタビュー内容を修正するなどした。例えば「別れた夫との死別」が「別れようと思っていた夫との死別」に変更された。生涯学習に関する語りについても、図３を見ながら語ることで、詳細になった。例えば、図３では「50代半ばで発音も勉強したい」から「発音体操に出会う」に至っているが、その間に何があったかは明らかになっていなかった。しかし、図４を共同生成することで「50代半ばで発音も勉強したい」「日本で外国語の本格的な発音を学ぶ」「発音体操を思い付く」「理論武装がしたくて海外の大学へ」「その大学でたくさんの人と出会う」「発音体操をみんなに広めたい」といった経緯があったことが語りから明らかになった。その他、人生の出来事の時系列が整理された。

(図4) Eさんと筆者が共同生成した生涯学習と人生の出来事の関係図



(出所) Ｅさん、筆者作成

インタビュー3回目の語り（図1，図4を見ながらの語り）

筆：Ｅさんは、覚えていらっしゃらないかもしれませんが、１回目のインタビューの時に「人生の不幸なことが、後に転機になることもあるのね。」とおっしゃっていましたね。まさにこの図（図４）がそれを表していますね。
Ｅ：あー本当だ。へーすごいね。私はこんななんだ。へー。嬉しいわ。
でも、聞いてもらえてよかったわよ、（筆者）に。
筆：そうですか？
Ｅ：そうよだって、自分じゃできないもの。自分で自身を振り返ろうと思っても、自分が向き合いたくないことには向き合わないでしょ。でも、（筆者が）一生懸命聞いてくれるから、嘘言っちゃいけないな。間違っちゃいけないなって向き合うことができたもんねー。

図４を共同生成した最後に２人で図を眺め、語り合った。

この語りから、トランスビューを行うことで、語りの内容が整理されていくだけでなく、図を示す行為そのものが、語り手の心を動かすことがわかった。

（6）Ｅさんのライフストーリーからみる、生涯学習と人生の出来事の関係性

次に、３回目のインタビュー中に、筆者とＥさんが共同生成した図４の清書（**図５**）をし、生涯学習と人生の出来事の関係性を探った。

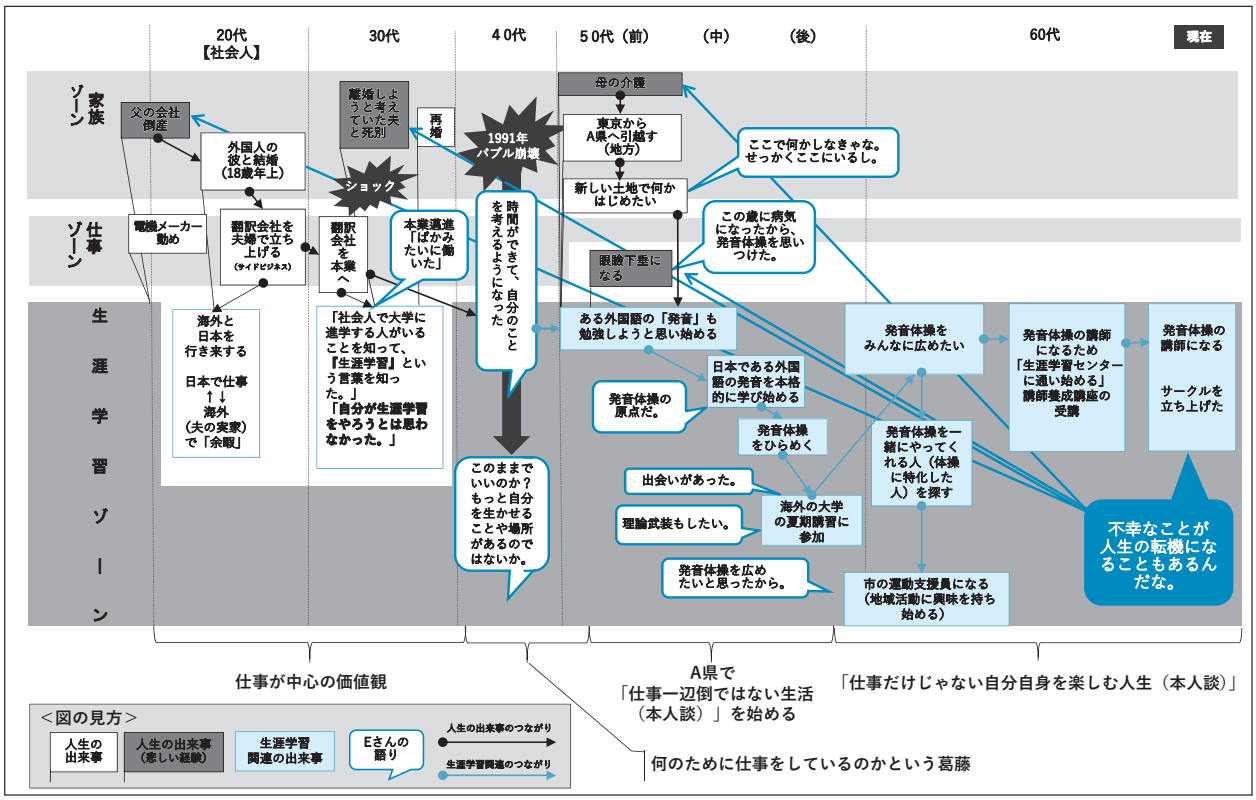
全３回のインタビュー内容を、人生の出来事は黒枠、Ｅさんが語った言葉は青枠の吹き出し、生涯学習関連の出来事は青の四角で表し、出来事の関連性を矢印でつないだ。今回のＥさんの語りでは、生涯学習に関連する語りの他、家族と仕事についての語りが多かったことから、３つのゾーンに分け、時系列で表した。

図５から、生涯学習は、日常の様々な出来事と密接に関係し合っており、影響を与え合っていることが言える。

Ｅさんの場合は「母の介護」「東京からＡ県に引っ越す」「新しい土地で何か始めたい」「Ｅさん自身が眼瞼下垂になる」といった人生の出来事と「バブル崩壊」という社会の変化をきっかけに「このままでいいのか。自分を生かせるものや場所があるのではないか」という人生の価値観の変化が重なり、「発音体操」という生涯学習を始めるきっかけに行きついている。さらに「発音体操」は翻訳家として外国語を扱う仕事をしていたからこそ考えついたことだ。このように、トランスビューを行い、語りを深めることで、生涯学習と人生の出来事の関係性を明らかにすることができた。

Ｅさんの人生を振り返ると、母の介護でＡ県に来ていなければ、眼瞼下垂の病気になっていなければ、バブルが崩壊し経済が衰退していなければ、ある外国語の発音を勉強しようと思い立たなければ、現在はなかった。さらに、外国語の発音を練習するきっかけとなっている翻訳家にならなければ、別れようと思っていた夫と死別し、落ち込みを振り切る

（図5）図4を筆者が清書した生涯学習と人生の出来事の関係図



（出所）筆者作成

かのように翻訳業にまい進していなければ。さらに、父の会社が倒産し、外国人の元夫と結婚を決意しなければ、今には至っていなかったと、Ｅさんは語り合いと、図４を共同生成する中で認識した。

図５より、「悲しい経験」を含めて、どのピースが欠けても、今はないことが再認識された。ビジュアルを活用することで、語りが豊かになり、共同生成することで、対象者は、自身の経験を見直すきっかけになり、「悲しい経験」を乗り越えてきた自分を再認識して「不幸なことが人生の転機になることもあるんだな」と語った。

以上の結果から、人生を語ることと現在の充実した生涯学習活動により人生の出来事の意味づけが変わっていることが明らかになった。

7．研究結果・考察③－ライフストーリーの聞き手である、筆者の自己エスノグラフィー－

本研究において、筆者は研究者という立場ではあるが、同時に高齢者の学習環境を高齢者と共に作ってきた職員の立場でもあり、働きながら大学院で学んでいた生涯学習者でもあった。ライフストーリーの聞き手である筆者が自身の研究ノーツを振り返りながら、語り合いの中で「高齢学習者」の捉え方をどのように変容させていったのかを考察した。

研究者の目線で初めてフィールドに入り、参与観察をしている時、筆者は研究者として、高齢学習者と出会った。仕事上では、一利用者に過ぎなかった対象者の存在が、観察

という目線で見ると、思いのほか熱心な学習者であるということに気がついた。

インタビューを始めた当初、筆者は、仕事上の自分という殻を少し破り、自身も一学習者として対話しようと試みていたが、今思い返せば、完全な学習者の目線にはなれておらず、プライベートの自分でもない「（仮）の自分」であった。

長い参与観察の中で、出会った９名の対象者はもう顔なじみのはずであるのに、ライフストーリーを語り合ううちに、なじみの対象者たちの過去や人生のさまざまな出来事を知り、学習者の一面だけでなく生活者としての一面を見ることができた。インタビューを重ねる過程で、時には対象者が、筆者の学習に対する考え方に興味を持って聞いてくれるようになった。その頃から筆者は、「（仮）の自分」から「ひとりの生涯学習者」として、高齢の学習者を「尊敬のまなざし」で見るようになる。インタビューを重ねる過程で、対象者たちの「悲しい経験」やそれを乗り越えてきた様を聞き、語りをもとに対象者の人生を想像したり、自分だったらどうするかと重ねるようになった。この「対象者の人生を未来の自分と重ねる」という行為は筆者だけにおこった現象ではない。対象者の語りからは「筆者の今の人生と対象者自身の過去を重ねる（比較する）」という行為がみられることがわかる。

対象者は自身の語りをとおして、人生のさまざまな出来事と、悲しい出来事を経験し、今では、そんな過去を微塵も感じさせないパワフルさ、前向きさを高齢学習者は筆者に見せてくれた。いつのまにか、筆者は、一学習者として、高齢学習者を先輩と捉え、尊敬のまなざしを向けるようになった。

高齢学習者の捉え方を変容させることにより、仕事に向かう姿勢も、人生に対する考え方も変化していった。仕事では、生涯学習社会の実現という、高齢者の今までの学習成果を生かす場をどう作っていくかという視点ではなく、高齢者が今まで歩んできた人生（過去の出来事）そのものに目を向け、現代の社会情勢だけでなく、今必要とされている学びの場はどのようなものか熟考するようになった。

加えて、筆者の「老い」についての考え方も変わっていった。研究当時20代後半であった筆者にとって「老い」は体力や思考が衰え、今までできていたことができなくなってしまうという、高齢者イメージのステレオタイプがあり、恐ろしい現象でしかなかった。しかし、先行研究でも考察されているとおり、決してそのようなことはない。何より、９名の高齢学習者のライフストーリーを聞き、語り合う過程で、筆者が身をもって体験した。

このように、若者が高齢者のライフストーリーを聞くこと、語り合うことは、高齢者に対するエイジズムの緩和につながるとともに、高齢者福祉事業等に関わる職員の仕事に向かう姿勢に対して変化をもたらすのではないか。

８．結論

「高齢者の学習動機と主観的幸福感に関する研究（高橋，2018）」によれば、高齢者の学習動機は「仲間の輪を広げたいから」「余暇を有効に使いたいから」「これからの生活

を豊かにしたいと考えたから」というような理由が挙げられ、「知識の獲得」への期待よりも対人関係の拡大や余暇への期待が学習動機になっていることが示されている。

しかし、本研究では、高齢学習者のライフストーリーに注目して分析した結果、直接的なきっかけは高橋（2018）のような理由であるが、そのように思い立つ以前から、人生のさまざまな出来事から影響を受けて「現状を変えたい・前に進みたい」という思いが内包されていることが明らかになった。とりわけ、近親者との死別や人間関係のもつれなどを経験した学習者はこの現象が顕著である。そして、Ｅさんの事例では、生涯学習と人生の出来事の関係性を図で可視化しトランスビューをすることで「生涯学習」と「人生の出来事」のつながりを明らかにすることができた。さらに対象者の語るライフストーリーに研究者が参与し、語り合いをしていくことで、「悲しい経験」という人生の出来事の意味づけが変容することを明らかにした。

本研究では、ライフストーリー研究を用いることで、「暗黙のうちに組み込まれてきた文化の物語の見直し」（やまだ，2000）をし、高齢者学習のきっかけや継続の動機は「生きがいづくり」などの大まかな理由だけではないことを明らかにした。

さらに本研究では、ライフストーリーの聞き手である筆者の自己エスノグラフィーという視点からも「高齢学習者」を考察した。執筆当時は働きながら大学院で学ぶという「生涯学習者としての当事者意識」を持ち合わせていた。当事者意識をライフストーリーの聞き手が持ち合わせていることで、部外者ではない「理解し合える関係」を築くことができた。具体的には「筆者の学習者としての人生と対象者自身の過去を重ねる（比較する）」といった行為や、筆者が「対象者の人生を未来の自分と重ねる」という過程を経て、語りを深め、ライフストーリーを共同生成しやすい環境を築いていったことがわかった。若者が高齢者のライフストーリーに耳を傾けることは、高齢者に対するエイジズムの緩和につながっただけでなく、語り手である高齢者が聞き手である若者の経験にも興味を持ち、気づきを得る効果もあることを明らかにした。

９．まとめにかえて－ライフストーリー研究の社会実装の可能性－

本研究は、ライフストーリー研究をとおして、高齢者の学習者としての一面を切りとるのではなく、学習者の人生を意識し、学習者の過去にも意味を見出して総合的に高齢学習者を捉えることが重要であることを示した。

本研究のフィールドは生涯学習センターであったが、生涯学習の定義からして、ＪＡの教育文化活動や助け合い活動等も生涯学習に位置づけられるといえる。

本結果は、高齢者のライフスタイルや考え方が多様化し、高齢者を一括りでは語れない現代にとって、高齢者の多様性を把握する一端を担うことができる研究結果となった。

加えて、生涯学習センターの職員であった筆者が、施設の利用者である高齢学習者を分析したことにより、エイジズムの緩和が見られたことを踏まえると、ＪＡグループの高齢者福祉活動をはじめ、高齢者あるいは異世代と関わる仕事に従事する者にとって、ライフ

ストーリーに耳を傾けることは他者理解を深める上で意義深いことと言える。ライフストーリー研究やインタビュー手法を社会実装していくことは、今まで現場ではあまり注目されてこなかった新たな気づきを得ることにつながるといえよう。

謝辞

本稿は、筆者が茨城大学人文社会科学研究科（2020年度修了）に提出した修士論文「生涯学習センターで学び続ける高齢者のライフストーリー－人生の出来事とその意味づけの変容－」を、本誌用に再編したものである。調査の実施に際して、実名の公開は控えるが、研究趣旨にご理解をいただいた生涯学習センターの職員の方々とインタビューに応じてくださった施設利用者の方々に多大なるご協力をいただいた。また、本研究の全般において、茨城大学人文社会科学研究科の伊藤哲司教授をはじめ、原口弥生教授、青山和夫教授、塚原伸治准教授に多大なるご指導とご鞭撻を賜った。ここに記してお礼を申し上げる。

引用文献

・権藤恭之（編）（2008）高齢者心理学．朝倉書店.
・原祥子，沼本教子（2004）老いを生きる人のライフストーリー――介護老人保健施設利用者における自己の人生の意味づけ．老年看護学，*8*（2），35－43.
・人生100年時代構想会議（2018）人づくり革命　基本構想. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000207430.html（2024年１月18日閲覧）
・久井英輔（2011）日本生涯教育学会における生涯学習研究30年．生涯学習研究ｅ辞典, http://ejiten.jpn.org/content5cd3.html?c=TkRnd05ESXk%3D/（2020年11月30日閲覧）
・堀薫夫（2015）高齢者が学ぶということ．LISN－Library & information science news, *164*, １－４.
・伊藤精男（2015）人材育成研究における「自己エスノグラフィー」の可能性．経営学論集, *25*（4），25－43.
・神崎真実・サトウタツヤ（2014）不登校経験者受け入れ高校における教員による生徒への支援――フィールドワークに基づくトランスビューモデルの生成．立命館人間科学研究, *30*, 15－32.
・国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（編）（2018）二訂　生涯学習概論ハンドブック．国立教育政策研究所社会教育実践研究センター.
・国立社会保障・人口問題研究所（1996）第４回人口移動調査. http://www.ipss.go.jp/ps-idou/j/migration/migration96.html/
・松本大（2016）社会教育職員として生きる――ある社会教育主事のライフストーリー．弘前大学教育学部紀要, *115*, 135－144.
・文部科学省（2006）平成18年度文部科学白書. http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200601/002/001/003.htm/（2019年３月20日閲覧）
・文部科学省（2016）平成28年度文部科学白書. http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201701/detail/1398165.htm/（2017年11月21日閲覧）
・文部科学省（2018）平成30年度文部科学白書. https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201901/detail/1421865.htm/（2020年６月19日閲覧）
・内閣府（2004）平成15年度　年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査結果. https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h15_kenkyu/html/0-1.html/
・内閣府（2018）高齢社会白書　平成30年版．日経印刷.
・内閣府（2020）高齢社会白書　令和２年版．日経印刷.
・中谷　彪（2006）日本の教育政策の展望と生涯学習――その特徴と問題点．武庫川女子大学紀要．人文・社会科学編, *3*,1－８.
・能智正博ら（2018）質的心理学辞典．新曜社.
・リンダ・グラットン／アンドリュー・スコット（2016）LIFE SHIFT．（池村千秋，訳）．東洋経済新報社.
・総務省（2021）情報通信白書令和３年版. https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/html/nd121100.html（2024年１月18日閲覧）
・杉浦健（2011）生涯発達における転機の語りの役割について．近畿大学教育論業, *12*（2），1－29.
・高橋一公（2018）高齢者の学習動機と主観的幸福感に関する研究――高齢者大学への参加動機と主観的幸福感の関係．モチベーション研究　Annual Report,No. ７，２－19.
・手打明敏（2005）近年の社会教育・生涯学習研究の研究動向――日本社会教育学会・日本生涯教育学会の年報の検討．筑波教育学研究, *3*, 163－177.
・やまだようこ（編）（2000）人生を物語る――生成のライフストーリー．ミネルヴァ書房.
・やまだようこ（2000）人生を物語ることの意味――なぜライフストーリー研究か？．教育心理学年報，第39集, 146－148.
・やまだようこ（2008）老年期にライフストーリーを語る意味．老年看護学, *12*（2），10－15.
・やまだようこ（2010）時間の流れは不可逆的か？――ビジュアル・ナラティヴ「人生のイメージ図」にみる、前進する、循環する、居るイメージ．日本質的心理学研究, No. ９. 43－65.
・やまだようこ（2021）ナラティヴ研究　語りの共同生成．新曜社